12. 新潟市古町花街における新道並びに路地の形成

- 江戸前期から昭和中期の地図を基礎資料として -

The Formation of Shinmichi and Alley in Furu-machi Kagai, Niigata City

- Using maps created in the early Edo period to middle Showa period as the basic data -

久保 有朋*・岡崎 篤行**

Aritomo KUBO and Atsuyuki OKAZAKI

Historic streets are precious historic properties in common with a historic building. Historic streets and many buildings remain in Furu-machi Kagai, Niigata City. To date, no study has clarified the history regarding formation of Shinmichi and alley. This study attempts accurately to clarify the unknown history regarding these streets focusing on early Edo period on middle Showa periods based on old maps and literature review. Major results are as follows. (1) Regarding formation of Shinmichi, 8 bancho side of Higashi-shinmichi was formed late Edo period, other shinmichi were formed middle to late Meiji period. (2) Regarding formation of alleys, Rokken-koji and Shonenji-koji are historic alleys. Rokken-koji were formed early to late Edo period, Shonenji-koji was formed late Meiji period.

keyword: Historic townscape, Kagai, Alley, Niigata, Urban formation

歴史的町並み、花街、路地、新潟、都市形成

1. 研究の背景と目的

長年継承されてきた街路は、歴史的建造物（以下、歴建）と同様に歴史的資産として重要である¹⁾。新潟市の中心市街地に位置する古町地区は、その格子状街区と街路網、堀割、均等な間口の敷地等の合理的な地割形態から「近世都市の到達点」と言われる²⁾。加えて、戦災被害が軽微であり、大火や地震の被害も限定的だったことから、現在でも戦前の歴建が数多く残っている³⁾。古町地区には全国有数の現役の花街である古町花街⁴⁾が存在し、街区は通り・小路・新道・路地の四段階の街路で構成される（図1）。近年、建築物の老朽化や後継者不足等を背景として、老舗料亭の閉業が全国的に相次いでいる。古町花街も例外でなく、歴史的町並みの喪失も懸念されている。今後、歴史的町並みを保全・継承し、地域振興を図るためには、当該地区を景観整備の重点地区と位置付け、面的整備を進める必要がある。そのためには、地区内に残存する歴建の価値とともに、古町花街における街路の歴史を明らかにすることも必要であり、調査の緊急性は高い。

街路の内、通りと小路は旧新潟町が現在地に整備された1655年当初の絵図に記されており、現在まで本数の増加等の大きな変化は見られない^{4),5)}。一方、背割線上の隙間を繋いで造られた新道と建築物の隙間である路地は、公式な街路ではないため新潟市史等の郷土史で扱われず、地図への記載が省略される場合が多く、その情報の少なさから形成の歴史は明らかになっていない。よって、新道及び路地の形成を詳細に明らかにすることは困難だが、現存する史料を網羅的に収集し、情報を整理することで、可能な範囲で形成の歴史を把握する必要がある。

そこで、本稿では町立て期の江戸前期から堀の埋立により街路景観が大きく変貌した昭和中期までを対象とし、古

町花街における新道と路地の形成の歴史を明らかにする。なお、江戸前期から中期までは残存する史料が極端に少ないため、本稿では主として江戸後期以降を分析対象とする。

2. 研究の位置付けと調査方法

2.1 研究の位置付け

新潟市古町周辺の街路に関して、通り・小路の形成並びに変遷は新潟市史^{4),5)}で明らかになっている。一方、新道に関しては、明治期の新聞記事を基に概ねの形成時期は報告されていたが⁶⁾、本稿は絵図・地図や複数の文献を用いて形成年代の検証を行うとともに、その形成経緯を明らかにすることに特徴がある。路地に関しては、現在の所有形態や空間構造を明らかにした研究⁷⁾はあるが、本稿のように現存する路地の形成時期や過去の路地の分布に着目した研究はない。また、敷地割の細分化と用途転用の関係⁸⁾に

図1 研究対象地区の街路構成 (2019年)

* 学生会員 新潟大学大学院自然科学研究科 (Niigata University)

** 正会員 新潟大学工学部建築学プログラム (Niigata University)

着目した研究はあるが、本稿では新道の形成と敷地割の関係に着目している点に特徴がある。上記の他、古町花街を対象として、歴建の外観特性を明らかにした研究⁶⁾、昭和初期以降の花街建築(料理屋・待合・置屋・検番等)の分布の変遷を明らかにした研究⁹⁾等があるが、これらは専ら建築物を対象とし、街路の歴史には着目していない。

他地域の類似研究として、京都市^{10),11)}における路地の形成をその背景や要因に着目して明らかにした研究があり、過去の路地の分布に関する調査手法は本稿で参考とした。

2.2 調査史料

(1) 新潟古八西新道開通記(図2)

かつて私道だった新道⁽²⁾は、通りや小路とは異なり公式の街路ではなかったため、行政文書に記載されることはなく、市史^{4),5)}等の郷土史で扱われることも稀であり、その形成に関する記録は殆ど残されていない。しかし、八番町側西新道に関しては、形成当時の発起人とされる富山清兵衛の息子「富山清一郎」により、その形成経緯が子細に記された「新潟古八西新道開通記(1936年発行・私家版、新潟県立図書館貴重資料室所蔵)」が現存することが分

かった。この史料には、八番町側西新道の1893年、1905年、1908年における形態並びに沿道の敷地割が分かる地図(表1. 番号22, 30, 31)も掲載されている。この史料は、現在知られている範囲では、新道の形成経緯を詳しく知ることができる、現存する唯一の史料と考えられている。

(2) 地図・絵図史料(表1, 図3)

新潟市歴史文化課職員2名、新潟市歴史博物館・館長及び職員1名、横越公文書分類センター職員1名、新潟大学人文学部教員1名の協力を得て、江戸前期から昭和中期の間に製作された地図・絵図を網羅的に調査し、古町花街の範囲が描かれた史料計53点⁽³⁾を収集した(表1)。この53点の史料の基本情報(史料名、著作者・発行元、製作年代、出典・所蔵先)及び史料上の街路の記載状況は表1に整理した。なお、地図に年代の記載がない場合、街路の開通状況や地割の形状等を読み取り、他の史料や文献と比較することで年代を推定する⁽⁴⁾。

(3) 文献・新聞記事(図4)

各新道の形成に関して、前述の「新潟古八西新道開通記」の他に、「星霜雜記(1888年発行、新潟大学図書館所蔵)」^{「越}

表1 調査史料(地図・絵図)一覧

基本データ				史料上の街路の記載状況※3、※4												鍋 大 門
番号	表題 (著作者・発行元)	地図 年代 ※1	出典・ 所蔵先 ※2	八 東	九 東	八 西	九 西	六 (東)	六 (西)	勝 念	傘	宝 持	宝 善	庄 内	六 下	
1	明暦年間新潟町地図	1655-1658	(1) 686p	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
2	享保十年新潟町立絵図	1725	(1) 10p	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
3	新潟町屋敷銘々名前附絵図	1751頃	(3)	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
4	新潟町絵図	1771	(4)	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
5	北越新潟湊町家略図	1801	(3)	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○	○	×
6	享和元年七月新潟湊商工業地域図	1801	(2) 300p	×	×	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○	×
7	文政六年写新潟町絵図	1823	(4)	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○	○	×
8	新潟図	1830-1843頃	(3)	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○	○	×
9	慶応二年新潟分間絵図	1866	(1) 18p	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×
10	第一大区新潟町明細絵図	明治初期	(4)	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
11	明治三年新潟港図	1870	(1) 226p	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
12	越後新潟全図	1870	(5)	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×
13	新刊新潟全図(藤沢秋陽編)	1870	(3)	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×
14	官有民有宅地区別(早川清作)	1875	(4)	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
15	第一大区二小区家別絵図(新潟町会所家文書)	1875	(4)	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
16	第一大区三小区家別絵図(新潟町会所家文書)	1875	(4)	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
17	細見案内絵図新潟美知の枝折(石附熊太郎編生田半治郎)	1877	(3)	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
18	新潟区地券番号更正図	1881	(4)	○	△	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
19	新潟県管内実測図	1881	(5)	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×
20	新潟区全図	1884-1886(推)	(3)	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
21	新潟警察署管内全図	1888	(3)	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	○	×
22	新潟市全図(耕山岡田有邦誌)	1889	(5)	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
23	新潟市実測図	1891	(5)	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×
24	新潟古八西新道開通記明治二十六年開通ノ新道	1893	(3)	△	△	○	△	△	△	○	×	×	×	×	△	△
25	旧更正図	1893-1902(推)	(6)	○	○	△	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
26	新潟市商業家明細全図(沢井清次郎)	1896	(3)	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×

※1…史料に年代が明記されていないため、年代を推定したものは「(推)」と記載する。
※2…(1)新潟市史文庫上、(2)新潟市史文庫下、(3)新潟県立図書館、(4)新潟市歴史博物館、(5)新潟大学図書館、(6)横越公文書分類センター、(7)新潟市立中央図書館、(8)新潟市歴史文化課
※3…八東：八番町側東新道、九東：九番町側東新道、八西：八番町側西新道、九西：九番町側西新道、六(東)：六軒小路(東堀通・古町通間)、六(西)：六軒小路(古町通・西堀通間)、勝念：勝念寺小路、傘：傘小路、宝持：宝(法)持院小路、宝善：宝善小路、庄内：庄内小路、六下：六軒小路下路地(仮称)、鍋大門：鍋茶屋大門アブローチ
※4…○：確認できた最も古いもの、○：○と同じ形で確認、△：○と異なる形で確認、×：確認不可、/：不明(史料の範囲外)、—：不明(史料の範囲内)、()：形成年代の推定に使用不可

後土産初編（1864年発行、新潟大学図書館所蔵）」にも記載が確認された。さらに、新潟新聞社が発行していた日刊新聞「新潟新聞（1877年～1941年発行、新潟県立図書館所蔵）」にも各新道の形成に関する記事が見られた。

2.3 調査・分析方法

まず、現在の対象範囲内における街路の状況に関して、現地調査と白地図の情報を基に整理する（図1）。次に、各種街路の基本情報（幅員、法的位置付け、近年の整備状況等）に関して、道路台帳の閲覧や実測調査、新潟市中央区建設課、新潟市建築行政課へのヒアリングにより明らかにする（図5）。その後、収集した53点の地図・絵図史料を基に、各新道並びに路地の記載を確認し（図2、図3）、その記載情報を史料の年代順に整理する（表1）。さらに、文献及び新聞記事から新道及び路地に関する情報を読み取り（図4）、地図・絵図史料から確認された情報と照合することで、新道並びに路地の形成年代を分析する（表2、図6、図9）⁶⁾。特に、八番町側西新道に関しては、「新潟古八西新道開通記」を基に形成経緯まで明らかにする（図7）。また補足的に、当時の敷地割が読み取れる表1の史料3・4・14・15・16・18・25・50の8点を用い、新道の形成との関係に着目し、敷地割の変化についても分析を行う（図8）。

なお、新道は地図により記載が省略されることもあり、路地に関してはその大半が建築物の隙間を通る通路であることから、基本的に地図に記載されることはない。そのため、史料の記載情報を整理する際、測量技術や製作意図の違い等により、史料間の記載に矛盾が見られる場合がある。本稿では史料間の記載に矛盾が見られる場合は、当時の実測に基づく分間絵図（表1. 番号9）、実測図（19・23）、都市計画図（40）、旧更正図（18・25・50）の記載をより正確

な情報として扱う。ただし、旧更正図に関しては、情報更新の度に新潟市の税務・法務職員により書き足しが行われているため、記載内容が製作年から数年後のものの可能性もある。よって、新道・路地の形成年代を推定する際、旧更正図の年代を直接的な根拠としては用いないこととする。

3. 対象地区・街路の概要

3.1 地区の歴史（図1）

旧新潟町は古町通と碓谷小路⁶⁾の交差点を中心として、1655年に現地に移転・整備され⁴⁾、古町地区は旧新潟町の概ね中央に位置する³⁾。古町花街の中核部は古町通8・9番町、東堀通8・9番町、西堀前通8・9番町に位置し、かつては4本の堀割に囲われた地区だったが⁷⁾、1964年に旧新潟町の堀割は全て埋立てられた¹²⁾。堀の埋立て前は堀の両側に街路が整備されていた（写真1、写真2）。近年は新道等の石畳舗装や建築物の修理修景に係る協定の導入が行われ、町並み整備が進められている。現在、13軒の料亭（内、図1範囲内に9軒）と30名の芸妓が営業している。

3.2 街路構成（図1）

旧新潟町は四段階の街路で構成され、南北軸の「通り」と東西軸の「小路」という2種の街路からなる格子状街区を基本とする²⁾。古町花街中核部は古町通り（写真3）・西

写真1 西堀と西堀通り・昭和初期 写真2 西堀通り・2018年（図1①）

写真3 古町通り・2018年（図1②） 写真4 広小路・2018年（図1③）

図2 新潟古八西新道開通記（1893年の敷地割）

図3 新潟区地券番号更正図（1881年頃 / 新潟市歴史博物館所蔵）

図4 越後土産初編（1864年 / 新潟大学図書館所蔵）

図5 各新道の幅員・延長（道路台帳を基に作成）⁸⁾
※図内の「Om」は新道の幅員

堀通り（写真2）・東堀通り・新堀通り（分類上は小路）・坂内小路・広小路（写真4）という6本の街路に囲われた区画である。加えて、通りと通りの間を平行に走る背割線上に造られた「新道」、通りと新道を繋ぐ敷地間の境界線上に造られた「路地」がある。新道としては、古町通りと東堀通りの間に通る「東新道」、古町通りと西堀通りの間に通る「西新道」が存在している。本稿では、坂内小路を境に町内が変わり、それぞれ形成時期も異なる（本稿4章に詳述）ことから、坂内小路以北を9番町側、以南を8番町側とし、新道を4種に分けて分析する。また、路地に関しては、本稿では(1)公道でない、(2)入口に扉等の障害物がない、(3)車の通行が困難な幅員、(4)人が無理なく通行できる幅員、(5)通り抜け可能か又は2軒以上の敷地や家屋へのアプローチ機能を保有、の5項目全てに該当するものと定義する。ただし、後述する通り「六軒小路」の一部は法定外公共物⁽⁹⁾だが、(2)～(5)には全て該当し、一般的に路地に分類され得るものであるため、例外的に路地として取り扱う。また、本稿では(1)～(5)に挙げた空間的条件及び制度的位置付けを基準に街路の分類を行うため、名称に「小路」と付されているも路地として扱う⁽¹⁰⁾。花街建築は主に新道と路地に面し、この2種の街路が花街の表通りとされる⁽⁹⁾。

3.3 各街路の基本情報（図1、図5）

道路法上の位置付けに関して、広小路は国道、他の通り及び小路、新道は市道に分類される。一方、路地は大半が私道とされるが、六軒小路の古町通り・東堀通り間は法定外公共物に分類される。建築基準法上の位置付けとしては、通り・小路は全て第42条1項1号道路、新道は全て2項道路である。路地は31本中3本が2項道路（図1内（Ⅱ））、2本が3項道路（図1内（Ⅲ））であり、その他の路地は建築基準法上、道路に該当しないものとされる⁽¹¹⁾。

各街路の平均的な幅員は、通り・小路・新道・路地の順に狭くなり、それぞれの最大・最小幅員は11.8～22.2m、

7.4～31.0m⁽¹²⁾、2.3～4.2m、1.2～3.3mである。新道の延長は約125～157mであり、幅員には不規則な変化が見られ、特に九番町側東新道及び八番町側西新道ではその傾向が顕著である⁽¹³⁾（図5）。また、路地は旧新潟町内で古町花街中核部に特に多く見られ、その多くは道の中心に敷地境界線がある特殊な所有形態であり、「へヤナカサ」「出し合いのコウジ」と呼ばれる⁽⁷⁾。補足だが、料亭「鍋茶屋」が面する八番町側東新道は「鍋茶屋通り」とも呼ばれる。

表2 街路の変遷に関する年表

年代 (西暦)	出来事〔 〕内に絵図・地図以外の出典を記載	位置 (図6)	史料 (表1)
主に絵図・地図から読み取れた街路の変化(1655-1957)			
1655	旧新潟町が現在地に移転、「古町通り」「片原通り(後の東堀通り)」「寺町通り(後の西堀通り)」「広小路」「坂内小路」「新堀通り」を確認【参考文献4】	(a)	1
	東西に「広小路堀(正式名称「四番堀」)」、南北に「片原堀(後の東堀)」「寺町堀(後の西堀)」の掘削を確認【参考文献4】	(a)	1
	「六軒小路(片原通り・古町通り間)」を確認	(b)	1
1655-1658	「新堀(正式名称「三番堀」)」の掘削を確認【参考文献4】	(c)	1
1658	片原通りと寺町通りの整備を確認【参考文献5】	(d)	—
1682	「六軒小路」「宝(法)持院小路」「庄内小路」を確認	(e)	5.6
1801	「六軒小路(古町通・寺町通間)」「宝善小路」を確認	(f)	7
1823	「片原通り」と「古町通り」の背割線上の下水堀が埋め立てられ、通行可能となる【星霜雜記(1888年)】	(g)	—
1859	鍋茶屋の住所に「新道(東新道八番町)」の表記を確認	(h)	—
1864	【越後土産初編(1864年)】	(i)	12
1870	「八番町側東新道」の全通を確認	(j)	19
1881	「勝念寺小路」を確認	(k)	21
1888	「六軒小路下路地(仮称)」を確認	(l)	24
1893	大火を契機に「八番町側西新道」「九番町側東新道」「九番町側西新道」の開通協議開始【新潟新聞(1893年8月24日)】	(l)	24
	「八番町側西新道」「九番町側東新道」「九番町側西新道」の開通決定【新潟新聞(1893年8月24日)】	(l)	—
	焼け残り箇所4軒目までを残し、「八番町側西新道」の開通を確認	(l)	24
1896	「九番町側東新道」の全通を確認	(m)	26
1902	「坂内小路」が2間分、八番町側へ拡幅【参考文献5】	(n)	28
1905	「八番町側西新道」の全通を確認	(o)	30
1908	大火による町全域の焼失後、整備により「八番町側西新道」の一部幅員の拡幅を確認	(p)	31
1912	「鍋茶屋大門アプローチ」を確認	(q)	32
1934-1957	「宝善小路」「六軒小路下路地(仮称)」の西新道・古町通り間のみ記載を確認	(r)	44-53
街路の大きな変化(1958-2019)			
1958	「新堀」の埋め立て完了【参考文献12】	(s)	—
1960	八・九番町内の「西堀」「東堀」「広小路堀」の埋め立て開始【参考文献12】	(t)	—
1964	旧新潟町内の全ての堀の埋め立て完了【参考文献12】	(u)	—
1972	「勝念寺小路」が西堀通り・西新道間のみとなる	(v)	31,44
1987	「新道」を市道とする告示【新潟市ヒアリング】	(w)	—
2006	「坂内小路」のボンネル舗装完了【新潟市ヒアリング】	(x)	—
2012	「広小路」の東堀通り・西堀通り間で拡幅工事が開始【新潟市ヒアリング】	(y)	—
2013	「広小路」の東堀通り・西堀通り間で拡幅工事が完了【新潟市ヒアリング】	(z)	—

※「位置(図6)」の記号は図6に、「史料(表1)」の数字は表1に対応。

図6 街路の変遷に関する概念図⁽¹⁴⁾

また、近年、新道の石畳舗装整備が進行している。2000年に八番町側東新道が他の新道に先駆けて石畳舗装となり、次いで2006年に八番町側西新道、2014年に九番町側東新道も石畳舗装となった。さらに、2017年には六軒小路の古町通り・東新道間が石畳舗装となり、同時期に東新道との交叉点に道標も設置された。

4. 新道の形成（表1、表2、図6）

4.1 八番町側東新道（図4）

表1の通り、全通⁽¹⁵⁾の記載を確認できた最も古い地図は、1870年の「12. 越後新潟全図」である。さらに、1888年の「星霜雑記」には、1859年の大火を機に下水堀だった背割線が通行可能になったと記載がある。また、1864年の「越後土産初編（図4）」には、八番町側東新道沿いの料亭「鍋茶屋」の住所を示す情報として「新道」の記載が確認できた。以上より、開通時期は1859～1864年と推測される（図6(3)）。なお、東新道八番町側に関しては、六軒小路以外の全ての新道・路地の記載が省略された史料を除き、1870年以降の全資料で確認できた。

4.2 九番町側東新道

坂内小路・広小路間の全通を確認できた最も古い地図は、1896年の「26. 新潟市商業家明細全図」である。「新潟新聞（1893年8月24日）」に開通協議実施及び開通決定の記載が見られることから、開通時期は1893～1896年と推測される（図6(4)）。さらに、1893年の大火で古町地区の建物の大半が焼失したため、地権者の都合上、工事開始は開通決定直後だった可能性が高いと考えられる。なお、「40. 新潟市都市計画区域図」には六軒小路・広小路間の記載がないが、「25. 旧更正図」を含む前後の年代の地図で全通が確認できるため、記載が省略されたものと推測される。

4.3 八番町側西新道（図5、図7）

九番町側東新道と同様、「新潟新聞」に1893年に開通協議実施及び開通決定の記載が見られ、坂内小路・広小路間の全通を1896年の「26. 新潟市商業家明細全図」より確認できた。加えて、形成経緯に関して、「新潟古八西新道開通記」によると、まず1893年の大火後に焼失箇所のみを先に開通し（図6(4)）、1905年に焼け残り箇所を整備し、全通したと記載がある（図6(5)）。1901年の「27. 新潟市全図」には、八番町側西新道の全通に先駆けて他3本の新道の全通していることが確認でき、上記の記載と一致する。さらに、1905年には一部幅員の極端に狭い箇所があった

が、1908年の大火後の整備でその幅員を拡張したとされる（図7）。この整備により、現在のような、全体に概ね一定の幅員を有する街路になったと推定される（図5）。

4.4 九番町側西新道

坂内小路・広小路間の全通を確認できた最も古い地図は1896年の「26. 新潟市商業家明細全図」である。前出の1893年の「新潟新聞」に開通協議実施及び開通決定の記載も見られるため、開通時期は1893～1896年と推測される（図6(4)）。なお、1934年の「44. 新潟市図市内構渠一覧図」では、六軒小路・広小路間の記載がなく、この傾向は1957年の「53. 新潟港図」まで7点の地図で見られるが、この区間が1934～1957年に存在したことはヒアリングにより確認できたため、いずれも記載が省略されたもの⁽¹⁶⁾と考えられる。

4.5 新道の形成と敷地割の関係（図8）

旧新潟町では、1655年の町立て当時、古町通りは表通り、片原通りや寺町通りは裏通りだったが、1682年に片原通りや寺町通りの路面整備がなされた。この整備以降、表側が古町通り、裏側が片原通り又は寺町通りに面する敷地「通し屋敷」が奥行き方向に半分に分割され、「半裁家⁽¹⁷⁾」が増加したとされる⁵⁾。この半裁家の出現により通りと通りの間に背割線が生じたが、当初は下水堀として使われていたとされる（「星霜雑記（1888年）」）。敷地割の記載が確認できた江戸中期以降の史料を見ると、通し屋敷は1751年で全体の約11%（15筆）と既に少なく（図8(1)）、1771年には全体の7%（10筆）となり（図8(2)）、1875年には

写真5 東新道・2018年（図1④） 写真6 東新道・2018年（図1⑤）

写真7 西新道・2018年（図1⑥） 写真8 西新道・2018年（図1⑦）

図7 八番町側西新道の変遷模式図

全体の4% (6筆)と緩やかに減少してきたことが読み取れる(図8(3))。このようにして、江戸前期の片原通り及び寺町通りの整備以降、通し屋敷の減少と反比例して半裁家が増加し、明治初期には一部を除き背割線が小路間を貫くようになったことが確認された。八番町側東新道は江戸末期の大火を契機として既に形成されていたが、その他の新道に関しては、明治中期の大火以降、この背割線上に順次形成されていく。

その後、1893～1902年の旧更正図では、半裁家の奥行きをさらに半分以下にした奥行き方向分割敷地⁽¹⁸⁾が僅かに確認されるようになった(図8(4))。全ての新道の開通時期が1893～1896年と推定されることから、奥行き方向分割敷地の発生時期と概ね一致すると考えられる。当該地区は戦災による被害が殆どなかったことから、敷地の細分化の主な要因は新道の形成だと推察される。加えて、1937～1965年頃のものとして推測される旧更正図では、奥行き方向分割敷地が全体の約3割と急増し、半裁家を3～5分割にした敷地も多数確認でき、敷地の高度利用がさらに進んだことも読み取れた(図8(5))。

5. 路地の形成(表1, 表2, 図6)

5.1 史料上の路地

路地の大半は建築物の隙間の通路であり、基本的に地図に記載されないものだが、1655～1957年の絵図・地図53点を調査したところ10本の路地が確認された(表1)。なお、六軒小路の本数は東西新道の形成による分離以前は2本、以後は4本と数える。路地の形成に関しては、市史等の文献史料や新潟新聞の記事にも情報が確認できないため、各路地の形成年代を正確に明らかにすることは困難である。よって、本稿では、記載を確認できた最も古い史料の年代を明らかにすることで、可能な範囲で形成時期の推定を行うこととする。

まず、入手できた史料の内、最も古い明暦年間(1655～

1658年)の絵図には「六軒小路(東堀通り・古町通り間)」の記載がある(図6(1), 写真9)。その後、1801年の絵図に「傘小路」「宝持院小路」「庄内小路」、次いで1823年の絵図に「六軒小路(古町通り・西堀通り間)」「宝善小路」(図6(2)、写真10)、1881年の実測図に「勝念寺小路」(図6(3), 写真11)、1888年の地図に「六軒小路下路地(名称不明のため仮称)」の記載が読み取れた(図6(4))。補足として、路地ではないが、1912年の地図に「鍋茶屋大門アプローチ⁽¹⁹⁾」も確認された(図6(5), 写真12)。

5.2 現在と史料上の路地の比較(図1, 図6)

現在、31本の路地を確認できる(図1, 路地の例: 写真13, 写真14)。絵図・地図には、基本的に路地は記載されず、位置を正確に示す地番等の情報も記されていないため、現在の路地と史料上の路地との比定は困難である。しかし、4本の「六軒小路」は現在まで名称と位置が伝わる路地であり、「勝念寺小路」は「新潟古八西新道開通記」に昭和初期の詳細な地番情報が記載されていたことから、これら計5本に関しては比定することができた。この5本については、形成経緯と併せ、次節にて詳しく取り上げる。

なお、前節に記した絵図・地図から読み取れた他の5本の路地に関しては、情報不足により正確な位置の比定はできない。そのため、現在の路地の位置と史料上の路地の位置を比較することにより、現状可能な範囲において、史料上の路地の現存の可能性を検証する(図1, 図6(6))。「宝持院小路」は1801年の資料5・6にのみ見られた鍵型の路地であり、同形の路地は現存しない。その他4本の路地に関して、「傘小路」は図1(A)、「庄内小路」は図1(B)、「宝善小路」は図1(C)、「六軒小路下路地(仮称)」は図1(D)の路地に近い位置にあったと考えられる。なお、「宝善小路」は1823年以降、1801年の絵図に描写された「宝持院小路」と概ね同じ位置に記載されており、二つの路地は名称も類似することから、「宝善小路」は「宝持院小路」が直線状に整備されたものである可能性も考えられる(図6(6))。

図8 敷地割の5時点比較⁽²⁰⁾

5.3 形成時期及び経緯（図6，図9）

六軒小路は古町花街で唯一、現在まで名称と位置が伝わる路地である。六軒小路の東堀通り・古町通り間の記載は明暦年間の絵図で確認でき（図6(1)）、1801年まで同じ記載が見られ、1823年には古町通り・西堀通り間の記載も確認できた（図6(2)）。これより、六軒小路は新道の形成に先駆けて、東堀通りから西堀通りまで繋がる路地になっていたことが分かった。さらに、1823年以降の史料を見ると、六軒小路は西堀通りから東堀通りへ真直ぐ通っており、現在も東堀通りから西堀通りまで見通すことができる。しかし、実測すると、古町通りを境として、中心線に約1.3mのずれが確認できた。中心線のずれ並びに史料への記載年代に差異があることから、東堀通り・西堀通り間の開通は同時期でなかったと推測される。以上より、六軒小路の東堀通り・古町通り間は1655年頃の町の整備当初から存在し、1801～1823年の間に古町通り・西堀通り間が形成されたと推測される。

勝念寺小路の記載は1881年の地図に見られ（図6(3)）、1957年まで古町通り・西堀通り間に存在したことを確認できた（図6(5)）。1936年と2011年の地図に記載の敷地地番及び勝念寺の位置の比較により、現在は西堀通り・西新道間のみ存在する可能性が高いことが分かった。なお、古町通り・西新道間は、1931年より隣接していた大竹座（新潟市内最初の常設映画館）の敷地拡大と路地上への建物建設（1972年竣工）により消失した可能性がある（図9）。

6. 結論

(1) 新道の形成時期に関して、既往研究より八番町側東新道は江戸末期、九番町側東西新道及び八番町側西新道は明治中期に開通したことは明らかになっていたが、本研究により各新道の形成時期をより絞ることができた。さらに、八番町側西新道は明治中期に一部を除き開通し、明治後期に全通したという形成経緯も明らかにできた。

(2) 新道と敷地割の関係を見ると、新道形成に先立ち、明治前期までに大半が半蔵家となっていた。さらに、新道の形成と同時期に奥行き方向分割敷地の発生も確認された。

(3) 路地の形成に関して新たに分かったこととしては、六軒小路の東側は江戸前期、西側は江戸後期の形成と推察されること、勝念寺小路は明治中期までに形成され、一部現存の可能性が高いことが挙げられる。さらに、江戸後期から明治中期の史料より、既往研究では明らかでなかった5本の路地を確認した。

(4) 今後の研究課題として、新道や路地に関する新史料の発見が必要不可欠だが、これまでの研究や市史編集等の史料調査においても、その存在を示唆する情報でさえ未発見だとされている。そのため、新史料発見の可能性は低いと考えられるが、今後も市歴史博物館等との連携を保ち、注意を払う必要がある。

【謝辞】

本研究は（公財）大林財団の2014年度研究助成を受けたものです。調査・分析に参加した神主大輔氏、ヒアリング調査・史料収集にご協力頂いた新潟市歴史博物館の伊東祐之氏、新潟大学の堀健彦氏には大変お世話になりました。ここに記して厚く謝意を表します。

【補注】

- (1) 花街とは、芸妓を呼べる料亭等がある程度集積する都市の一面を指す。古町花街地区の概要は本稿3-1に後述する。
- (2) 道路台帳等を管理する新潟市中央区建設課管理係によると、新道が市道と告示されたのは1987年であることが確認できた。なお、東新道が私道であった時期は、道に面する敷地所有者が東新道の固定資産税を支払っていたことがヒアリングにより分かった。
- (3) 参考文献13)より、新潟県においても明治時代に「壬申地券地引絵図」「地租改正地引絵図」「地籍編成地籍地図」「地押調査更

写真9 六軒小路（東） 写真10 六軒小路（西） 写真11 勝念寺小路
2018年（図1⑧） 2018年（図1⑨） 2018年（図1⑩）

写真12 銅茶屋大門の
アプローチ 2018年（図1⑪） 写真13 路地 2018年（図1⑫） 写真14 路地
2018年（図1⑬）

図9 勝念寺小路周辺の地番比較

正地図（旧更正図）」の4種の地籍図が作成されていたとされる。これらの地籍図や土地台帳・道路台帳等の行政資料の閲覧・入手を試みたが、調査対象地区における昭和中期以前の分析に有用な史料として確認できたものは「旧更正図」のみであった。

(4) 近世・近代史を専門とし、市史編纂も担当した新潟市歴史博物館館長・伊東祐之氏、並びに歴史地理学を専門とする新潟大学准教授・堀健彦氏にご協力頂き、検討を行った。特に、前述の伊東氏は、旧新潟町の歴史を扱う史学・地理学等の研究者や郷土史家、新潟市歴史文化課職員等の間では、旧新潟町の近世・近代の歴史や史料に最も精通する人物として知られ、本稿における史料収集の精度の向上に当り、多くの助言・助力を頂いた。

(5) 本稿4章に後述する通り、新道の形成において、大火は主要な契機の一つと考えられる。そのため、新道の形成に関するより詳細な情報を得るため、新潟市歴史博物館館長・伊東祐之氏等の協力の下、行政資料を含む大火や災害に関する資料も参照したが、新道及び路地の形成や変遷に関する新情報は入手できなかった。

(6) 図1の範囲内には存在せず、「新堀通り」より約180m南に位置する東西に伸びる街路。詳細な位置は参考文献9)を参照。

(7) 旧新潟町は基本的に両側町だが、以前は堀が町を分断していたため、堀の両側では片側町となっていた。その名残として、堀があった通りの両側では現在でも町名が異なる。例えば、西堀通の両側の町名は「西堀前通〇番町」と「西堀通〇番町」である。

(8) 道路台帳には、基本的に公道の区域と幅員、建物概形、アーケード、塀等の情報が記載され、敷地割は記載されていない。図5では、公道の区域と幅員並びに建物概形のみを記載している。

(9) 道路や河川等の公共物の内、道路法、河川法、下水道法、海岸法等の法律の適用又は準用を受けない公共物を指す。現在は市に所有・管理されており、公道に準ずるものと位置付けられる。

(10) 古町界隈に居住する住民の話し言葉において、路地と新道は「狭い道」という意味とともに「小路（こうじ）」と呼ばれている。

(11) 景観保全の障害となり得る2項道路や無接道道路に関する解決手法としては、3項道路への指定や建築基準法第43条ただし書きによる認定、連担建築物設計制度の適用等がある。

(12) 同じ小路でも、堀があった広小路と新堀通は通りと同程度の広い幅員だが、堀のなかった坂内小路は極端に幅員が狭い。なお、広小路は2013年に完了した万代島ルートの道路拡幅事業により、最大幅員が23.5mから31mへと大幅に拡幅された。

(13) 各新道で幅員の変化の度合いに差異が見られる要因についても調査したが、特定に繋がる情報は得られなかった。

(14) 新道の全通の定義は、「広小路・坂内小路間、あるいは坂内小路・新堀通り間を通り抜け可能であること」とする。

(15) 路地は基本的に絵図・地図に描写されないため、図6ではあくまで該当年代間の史料で描写を確認できた路地を記載する。

(16) 複写元の地図の作成に際し、他の情報が優先されることで街路の描写が省略され、その後に複写された地図にも反映されてしまった事例が他地域の地図において確認されており、当該史料においても同様の背景があったと推測される。

(17) 参考文献5)の91頁の記述によれば、半裁家（はんざいや）とは「奥行きが通し屋敷の半分の敷地」とされる。半在家とも記載。

(18) 本稿では、半裁家の長辺方向を更に分割した敷地と定義する。

(19) 建築基準法上は第42条1項3号の道路に位置付けられているが、元々鍋茶屋へのアプローチとして整備され、現在も基本的には同様に使われていることから、本稿では路地として扱わない。

(20) 表1に示す通り、近代以前の詳細な街区や敷地割を確認できる資料は非常に少なく、図8(1)、(2)においてはそれぞれ表1の史料3、4が唯一の情報であるため複数の地図を比較し、正確性を高めることが不可能である。加えて、当時の測量技術の低さにより、地図自体の精度も近代以降の地図と比較して低いと考えられる。一方、図8(3)、(4)、(5)においては、広小路の線形は概ね一致しており、各年代における複数の地図の比較により、その正確性も確認できた。しかし、図8(1)、(2)と図8(3)、(4)、(5)で線形の異なる広小路については、実際に図8(2)と(3)の間に変化したのか、単に各資料の描き方が異なるだけなのかを判断することは、新たな史料が発見されない限り不可能と考えられる。また、各年代で僅かに異なる敷地割の間口幅についても、実際に僅かに

変化したのか、単に各資料の描き方が異なるだけなのかを判断することは、詳細な敷地割が把握できる史料が限定されていることから、非常に困難と考えられる。以上のような不確実性があるため、新たな史料の発見は今後の課題となるが、広小路等の街路の線形や敷地割の間口幅が実際には変化していなかったとしても、本稿の分析結果には影響を与えない。

【参考文献】

- 1) 新谷洋二 (2006), 「歴史を未来につなぐまちづくり・みちづくり」, pp. 12-13, 学芸出版社
- 2) 宮本雅明 (2006), 「都市空間の近世史研究」, pp. 496-497, 中央公論美術出版
- 3) 岡崎篤行、今村洋一 (2012), 「湊町新潟の再生」, 都市計画, Vol. 61, No. 2, pp. 38-39
- 4) 新潟市史編さん近世史部会ほか (1995), 「新潟市史 通史編1」, 新潟市
- 5) 新潟市史編さん近世史部会 (1997), 「新潟市史 通史編2」, 新潟市
- 6) 佐藤正宗、岡崎篤行 (2009), 「近世の町割を継承した近代花街の都市空間と建築特性—港町新潟の古町花街を対象として—」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1, pp. 781-782
- 7) 小松田里美、岡崎篤行、今村洋一、久保有朋 (2018), 「町屋の隣棟間に形成された路地の所有形態と空間構造—新潟市古町地区を対象として—」, 日本都市計画学会都市計画報告集, Vol. 17, pp. 332-338
- 8) 小山航、藤川昌樹 (2010), 「新潟市中心市街地における街区分割の変遷とその土地利用への影響」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1, pp. 605-606
- 9) 久保有朋、岡崎篤行、松井大輔 (2016), 「花街を構成する建築物に関する分布の変遷—昭和初期から現在における新潟市中央区古町の三業を対象として—」, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 81, No. 726, pp. 1695-1703
- 10) 水島あかね (1999), 「近代京都域における路地空間の形成過程について」, 日本建築学会近畿支部研究報告集, F-1, pp. 693-696
- 11) 三森弘、花里俊廣 (2012), 「建築基準法制定時における京都・都心部の空間構造」, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 77, No. 681, pp. 2585-2593
- 12) 新潟市史編さん現代史部会 (1997), 「新潟市史 通史編5」, 新潟市
- 13) 高橋一樹 (2011), 「新潟県の明治初期地籍図—北蒲原郡の地租改正地引絵図を中心に」, 国立歴史民俗博物館研究報告, Vol. 163, pp. 385-392, 2011. 3